

ASSW2015開催報告

北極科学サミット週間（ASSW）2015は、国際北極科学委員会（IASC）の主催、日本学術会議の共同主催で、2015年4月23日から30日まで、富山国際会議場（富山市）で世界26カ国の国と地域から708名の参加のもと開催され、大盛会のうちに終了した。ASSWは毎年1回開催される北極科学に関する世界最大のイベントであり、日本での開催は初めてであった。

(1) IASC関連会合

開催期間前半（23-26日）には、IASC関連の諸会合とパートナー団体の会合等が行われ、各分野での今後の研究課題や北極研究の推進に関する議論のみならず、北極における科学研究の社会への貢献のあり方や、重要性の高い研究課題を国際協力により推進する方策などの議論が活発に行われた。

(2) 科学シンポジウム ISAR-4 / ICARP III

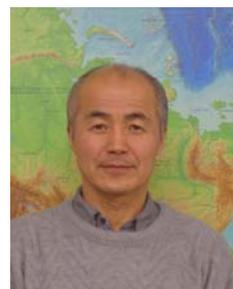
後半（27-30日）は科学シンポジウムISAR-4/ICARP IIIが開催された。27日には、ASSW2015の名誉総裁に就任された高円宮妃殿下ご臨席の元、ISAR-4/ICARP III科学シンポジウムの開会式が開催され、高円宮妃殿下より北極研究に対する期待のお言葉をいただいた。開会式に引き続いてChristopher Rapley教授による特別講演、IASC運営の功績者らによる“IASC History Panel”がIASC設立25周年セレモニーとして開催された。

(3) ISAR-4 / ICARP IIIポスター賞

ポスター発表を行った学生および学位取得後5年以内の若手研究者を対象にポスター賞を授与した。審査はISAR-4 Science Steering Committeeのメンバーが行い、30日の閉会式で金賞1名、銀賞2名の受賞者を発表した。

(3) 公開講演会「富山に北極がやって来た!」

26日には公開講演会「富山に北極がやって来た!」が開催され、富山県のみならず近隣県から約500名が参加した。IASC議長 Susan Barr氏、地球物理学者の赤祖父俊一氏、写真家の石川直樹氏の講演の後、4名の専門家により、環境が変化している北極と富山の雪や氷を対比したパネルディスカッションが行われた。



ASSW2015事務局長 児玉 裕二



ISAR-4/ICARP III 科学シンポジウム開会式の様子（撮影：国立極地研究所）

特集

- ASSW2015開催報告
- ASSW2015におけるビジネス会合報告
- ISAR-4 / ICARP III 報告
- JpGU期間中のJCAR活動報告
- 第三期JCAR運営委員選挙を終えて
- researchmap をつかいましょう
- 編集後記

IASC関連の諸会合報告

執筆者



国立極地研究所

国際北極環境研究センター

特任教員

大畑 哲夫（おおはた てつお）

ASSW2015の前半には、IASC関連の諸会議、およびパートナー団体の会議などが行われた。年1回のASSWに合わせて会合を持つ団体が多く、様々な重要な決定が為される。前者としては、評議会会合、分野別5作業部会（以後、WGと略記する）の会合、ロシア北極に関する国際研究イニシアチブ（ISIRA）があり、後者としては極域若手研究者協会（APECS）、太平洋北極グループ（PAG）、北極研究オペレーターフォーラム（FARO）、ヨーロッパ極域評議会（EPB）等がある。詳細を知りたい方は国立極地研究所ウェブサイトに載っている会議報告を見ていただきたい。

IASCの諸会合

(1) 共通セッションと評議会

IASC関係の会議は、1日目午前 common sessionというセッションが新たに設

けられ、そこでIASC全般についての状況がまとめて説明された。また1日目午後には、5つのWGの会合があったが、これについては後述する。新しい試みは有効であったと考えられるが、WGによっては、各WGが短縮したことに対する文句も出た。

IASC評議会（Council）は2日目に開催された。これは北極8カ国と他14カ国の計22カ国の代表1名ずつで構成されていて、IASCの最高議決機関である。IASCの委員長は2014年からSusan Barr氏（ノルウェー、歴史学者）になり、会議の議長を務めた。諸WGやパートナー団体との連携や事務局活動報告などが前半を占めた。

特筆すべきこととして、2年前に設置され北極データを議論するデータ常置委員会（Data Standing Committee）が、去年、北極評議会・IASC共同設置の北極長期観測ネットワーク（SAON）のデータ委員会と合体し、北



写真1：評議会・ラウンドテーブルでの討論（撮影：国立極地研究所）

極に関する1つの北極データ委員会（ADC）として活動を始めたことが報告された。2015年10月にカナダで開催される第2回極域データフォーラム（Polar Data Forum）が重要な会議になることが指摘された。

事務局報告として、IASCは近々新Web-site開設を予定していること、昨年から実施している3か国からの事務局支援（日本からは極地研・末吉哲雄氏参加）が円滑に進み運営に効果を上げていることの説明があった。また、若手支援（去年から始まったIASC Fellowship制度、以前からのAPECS support）については順調に運用されていることが説明されたが、後で聞いたところ日本を含めアジアからの応募は皆無に等しいことが分かり、日本の若手が応募することが求められていることが分かった。

2016年のASSWは3月12-18日にアメリカ・フェアバンクス、2017年は4月1-7日ブラハで開催されることが決定済みであるが、2018年はSCARとの共同開催となるOpen Science Meeting（スイス・ダボス）に合わせる事が説明された。

運営事項として、IASCからのSAON 共同委員長はDavid Hick氏（カナダ）からLarry Hinzman氏（アメリカ）になることが承認された。またポルトガルのIASC加盟が認められ、IASCは23カ国となった。10年に一回のIASCLレビュー作業、およびIASCの今後の戦略文書作成の作業を実施することが認められた。また重要なこととしてドイツのIASC事務局支援が2017年には終わるため、その後の引受国が必要

であるとの発言があった。

(2) 各WGの会合

IASCには、大気、雪氷圏、海洋、人文社会、陸域の5つのWGがあり、2011年から重要研究課題の抽出、WS開催、実施方法の検討などが行われている。

大気（AWG: Atmosphere WG）には日本から田中博氏（筑波大学）と猪上淳氏（国立極地研究所）が委員として参加している。会議の前半では、現在進行中の活動についての報告が6件あった。MOSAICの現状報告、北極-中緯度リンク（以下Linkages）及びそれに関連するワークショップ等の開催報告（高緯度大気海洋海水相互作用シンポジウム、EGU Linkagesセッション）が行われた。MOSAICについては2015年7月22-24日にポツダムで開催されるImplementation Workshopで詳細を詰めていくことが指摘された。また関連するWMOの計画であるPPP/YOPP（Year Of Polar Prediction）について紹介があり、その他、大気汚染ワークショップ、データレスキュー、Clic関係、Last Millenniumの極域気候環境変動に関する活動紹介があった。会議の後半では予算配分について議論を行い、Air pollutionやPolar Prediction startup等の5つの活動について予算を割り当てることを承認した。次期議長にベルゲン大学のThomas Spengler氏（ノルウェー）が選出され、副議長としてはKathy Law氏（フランス）、John Cassano氏（アメリカ）、Hall-dor Bjornsson氏（アイスランド）が任命された。



写真2：各国のIASC評議会委員（撮影：Günther Heinemann）

雪氷圏 (CWG: Cryosphere WG) には日本から榎本浩之氏 (国立極地研究所) と杉山慎氏 (北海道大学) が委員として参加している。この1年のWS等の活動報告の後、2011年に決まった重点課題 (Scientific Foci)、(1) Sea-ice boundary layer dynamics、(2) Permafrost、(3) Tidewater glacier dynamics and response to climate change の見直しなどを進めるワークショップが提案された。比較的小さな活動にまんべんなく予算を割り当ててきたこれまでのCWGの方針を、今後再検討していく気運が見られた。今後の活動予定として「カービング氷河、氷床質量収支、海水準に関するワークショップ (ISMASS)」「極域と山岳域の微生物に関する会合 (2015年9月6~9日、チェコ)」「Ilulissat Climate Days (2015年6月2~5日、グリーンランド、イルリサット、150名参加予定)、Permafrost Carbon Network (2015年5月11~12日、アメリカ、アリゾナ)、データマネージメントGTN-Pワークショップ (カナダ凍土学会と同時開催) が紹介された。次期の執行体制は、議長が Francisco Navarro氏 (スペイン) となり、副議長が Walter N. Meier氏 (アメリカ)、Jon Ove Hagen氏 (ノルウェー) と Martin Sharp氏 (カナダ) となった。

海洋 (MWG: Marine WG) には日本から山口一氏 (東京大学) と島田浩二氏 (東京海洋大学) が委員として参加している。以下のテーマについての活動報告が為された: Towards a Seasonally Ice Covered Arctic Ocean、Biology and Ecology of Arctic Cods、Distributed Biological Observatory (DBO)、Greenland Icesheet/Ocean Interaction (GROCE)、The Big Black Box (BBB)。また Pacific Arctic Group (PAG) および Arctic in Rapid Transition (ART) の活動内容が紹介された。“IASC Marine Working Group 5 Year Strategy”に記載されている項目を再確認したところ、Physical Oceanographyが陽に出ていないことが指摘され、また全体としては生物系が多く、メンバーの専門に偏りがあることが指摘された。幾つかのworkshop/symposiumのサポートが提案され、承認された。副議長1名の改選を行い、Lee W. Cooper (アメリカ、University of Maryland) を選出した。

人文社会 (SHWG: Social & Human WG) には日本から高倉浩樹氏 (東北大学) が委員として参加している。最大時には40人の参加があり、まず2014年度活動報告を行った。北極の半分をしめるロシアのメンバーが本作業部会に入っていないことが問題であると指摘さ

れた。ICAPRⅢの関連事業として5件の会合が報告された。また「北極人間開発報告II」(AHDR II) の刊行されたこと、SHWGの関連活動として、EU-PolarNet (EUの政策決定者、ビジネス界、地域社会と研究者の交流) のシンポジウムの開催が報告された。科学的焦点 (Scientific Foci) については激しい議論の末、以下となった: Arctic residents and change: sustainability、Perceptions、representations and histories of the Arctic、Securities、governance and law、Natural resource[s] / use / exploitation and development: past, present, future、Human health and well-being。今後の企画として、以下が採択された。(1) Gender Asymmetry in Northern Communities: Building a Research Network for the Nordic Countries, Baltics and Russia (NORGA) by J. Otto Habeck (ドイツ) (2) A European Arctic Policy: The Role of EU Non-Arctic Member States by Elena Conde (スペイン) など6件が採択された。以下2件はcross-cutとして提案することになった: (1) Energy Justice in the Arctic: Implications for Energy Infrastructural Development in the Arctic。(2) Arctic Air Pollution。役員の改選があり、議長に Gail Fondahl氏 (IASSA, カナダ)、副議長に Peter Scold氏 (スウェーデン) と高倉浩樹氏が選出された。予算は事務局提案の通りに決定。

陸域 (TWG: Terrestrial WG) には日本から杉本敦子氏、中坪孝之氏 (広島大学) が委員として参加している。出席者は26名で、議長および担当者から活動報告2件のWS および地図作製など2件の報告があった。日本委員はGRENEなど日本の活動の紹介を行った。今後の実施予定の以下の活動について説明があった: Arctic Freshwater Synthesis (Warwick Vincent氏)、Polar and Alpine Microbiology Conference (Josef Elster氏)。新規提案の活動として、Catalysis for Treeline Expansion Under Global Change: Research Synthesis and Future Priorities Workshop (Warwick Vincent氏)、Permafrost Carbon Network (Vladimir Romanovsky氏) など4件があった。次期議長は留任で Ingibjörg Svala Jónsdóttir氏 (アイスランド)、副議長が Josef Elster氏 (チェコ) と Philip Wookey氏 (イギリス) が Vice-Chairとなった。また、予算についてまとまらず、継続審議となった。

(3) ISIRAの会合

これはIASCにおけるアドバイザーグループであり、ロシアと他諸国の情報交換、協力構築の場となっており、杉本敦子氏(北海道大学)が委員として参加している。

議長のArkady Tishkov氏 (Institute of Geography、ロシア) から、2014年からの状況と活動が紹介された。まず、ロシア国内では、北極に対して関心が高まり、多数の会合が開催された。2020年までのロシア北極圏の開発と国家安全保障の戦略が出され、北極科学の推進が最優先事項の一つになっている。ただ、北極圏のいくつかの地域では、外国人が研究目的で訪問することが困難になっていることが指摘された。米国・カナダが減少、フィンランド・ドイツ・日本は変化ないことが分かっている。また、ロシアの研究所や国際共同研究プロジェクトの紹介があった。

続いて、Vladimir Pavlenko氏 (Arkhangelsk Scientific Center、ロシア) から、2014年10月の北極に関するシンポジウムの紹介があり、毎年開催する予定であり、諸外国の研究者の参加を歓迎する事が報告された。また、Alexander Makshtas氏 (AARI、ロシア) からロシア北極域のObservatoryであるTiksi、Baranovaの紹介があった。次に、恒例となっている4名のロシア人若手研究者 (ECS) の研究紹介と、Volker Rachold (IASC事務局長) から、ICARP IIIおよびIPPIの説明があり、議論があった。

その後、米国、ノルウェー、ドイツ、日本のNational Reportが紹介された。日本からはGRENE、ArCS、COPERA (Belmont Forum)、日本-フィンランドのロシアにおける共同研究、日露の共同研究に関するワークショップ、および検討中の若手交流などが報告された。



執筆者



北海道大学大学院地球環境科学研究院

教授

杉本 敦子（すぎもと あつこ）

ISAR-4 / ICARP III 報告

ASSW2015の後半の科学シンポジウムは、第4回国際北極研究シンポジウム (ISAR-4) と第3回国際北極研究計画会議 (ICARP III) との合同シンポジウムとして開催した。プレナリーセッションに加え、スプリットセッションは、ISAR-4としての5セッション、ISAR-4とICARP IIIのジョイントセッションとして11セッション、ICARP IIIが10セッションの合計26セッションで口頭発表とポスター発表があり、活発な議論が行われた。ISAR-4は今回が4回目の開催であるが、ASSW2015の中での開催、ICARP IIIと合同開催などのこれまでのISARにはなかったことや初めての取り組みなどが多数あった。

シンポジウムの開会式では極地研白石所長の挨拶に続き、IASC議長Susan Barr氏、日本学術会議 大西議長、文部科学省から森副大臣などの来賓の挨拶に加え、高円宮久子妃殿下から北極研究に対する期待のお言葉を賜った。

オープニングのプレナリーセッションでは、著名な研究者の講演として、Christopher Rapley 氏の講演に引き続き、ICARP IIIとISAR-4のイントロダクションのあと、IASC25周年記念のイベントとしてIASC History Panelが行われ、前プレジデントなど7名のIASCゆかりの研究者がパネリストとして討論を行った。また、2日目のプレナリーセッションでは、日本のGRENE北極気候変動プログラ

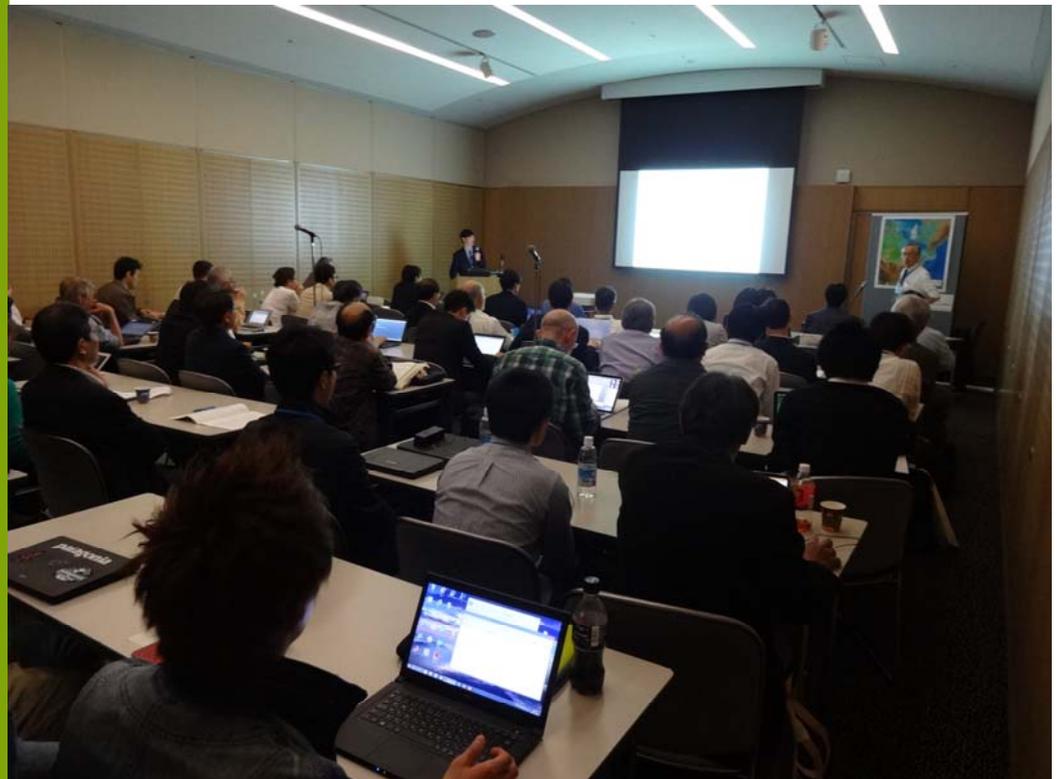


写真1：ISAR-4 / ICARP III セッションの様子（撮影：国立極地研究所）

ムの成果について極地研山内プロジェクトマネージャが紹介した。

今回のシンポジウムにはこれまでのISARと異なる点がいくつもあるが、最も大きく異なる点は、自然科学系のセッションだけでなく、人文社会科学系のセッションも開催されたことである。26のセッションの分野は多岐にわたり、北極で進む温暖化とそのメカニズムに関するものや中緯度帯の気象への影響、北極域温暖化に伴う海洋・海氷、水域生態系、積雪、氷床、凍土・陸域生態系の変化、北極域の古気候や古環境などのセッションに加え、GeospaceとGeoscienceのセッションがそれぞれISAR-4とICARP IIIのセッションに加わり、自然科学系だけを見てもカバーする分野は広がったと言える。また、北極域における研究を推進する上で必要な観測態勢やデータ利用、技術に関する内容を議論したセッ

ションもあった。人文社会科学系の分野では、北極域の持続可能性、コミュニティとの協働、エネルギー資源、水産資源や北極海航路などに関する政治学、ガバナンスなどが議論された。また、自然科学分野のセッションでも、コミュニティとの対話やデータの共有など、人間・社会に対する視野を含む内容のセッションが多数あり、今日の北極域の科学の方向性がよく表れた内容であったと言える。シンポジウムの最後に出されたConference Statementにも、北極域の急激な変化とその影響について理解を深めて行くことの必要性、そしてそのために様々な分野が連携して取り組む必要があること、また科学者と住民、政府や産業界を巻き込んで行くことの重要性がまとめられている。



写真2 : ISAR-4/ICARP III開会式の様子 (撮影 : 国立極地研究所)



写真3 : Susan Barr氏 (IASC議長) と
受賞者の吉澤枝里氏 (東京海洋大) (撮影 : 国立極地研究所)

執筆者

国立極地研究所国際北極環境
研究センター

JCAR事務局長

兒玉 裕二（こだま ゆうじ）

JpGU期間中のJCAR活動報告

JpGU2015年大会

日時：2015年5月24日(日)～5月28日(木)

場所：幕張メッセ国際会議場（千葉県）

JCARは、今年度も例年通りJpGU大会期間中に様々な活動を行った。

「北極域の科学」セッション

まず、大会2日目の25日午後より研究交流WG委員が中心となりセッション「北極域の科学」を開催した。コンビーナーは竹内 望委員、檜山 哲哉委員、平澤 享委員、田中 博委員、野澤 悟徳委員の5名。19件の口頭発表と9件のポスター発表が行われた。総参加者数は約50名。

JCAR全体集会

大会3日目の26日13時から2015年度JCAR全体集会を開催した。榎本委員長より挨拶として、JCAR設立後4年が経過したこと、長期構想が完成したこと、GRENEが最終年度となる為に、次の第3期運営委員会が中心となって体制検討を行っていくことになるだろう、といった話があった。

次にJCARの活動として、「ASSW2015開催」、「北極環境研究の長期構想の作成」、「第3期運営委員選挙」、「北極域の科学のセッション」、「各WGの活動」を報告し、続いて活動計画として「第3期運営委員長選挙」が実施中であり、次の第3期運営委員会で規約の改正などJCAR



写真1：JCAR全体集会の様子（撮影：照井 健志）

の体制に関して検討を行うこと、また11月には国立極地研究所で「極域科学シンポジウム」が開催される予定であり、共催予定であることなどが報告された。

その後、若手研究者派遣支援事業の報告として、平成26年度アメリカのIARCに派遣されたNuerasimuguli Alimasiさんから、現地での研究や生活に関すること、また周囲の環境などについて報告頂いた。

「意見交換」では参加者からの質問を受け付け、今年度の若手派遣支援事業に関わること、次期プロジェクトに関わること、長期構想の今後の活用などに関して質疑を行った。

ブース出展

国立極地研究所国際北極環境研究センターと協力しブース出展を行った。昨年度と比較し、スタンプラリーのようなブースを巡らせるイベントがなかったためブース来場者は少なかったが、北極域に興味を持つ大学生や高校生は積極的に見学に来た。北極域データアーカイブチームにより半球状のスクリーンにAMSR2の衛星画像を投影したDagik Earthの展示が行われ、手の動きでDagik Earthを操作させることで来場者に体験型の展示を提供することができた。また、日本の北極研究のDVD上映も好評であった。



写真2：JCARのブースの様子（撮影：照井 健志）

執筆者



国立極地研究所国際北極環境
研究センター

特任研究員

照井 健志 (てるい たけし)

JCAR第3期運営委員選挙報告

3月20日に公示を行ったJCAR第3期運営委員選挙は、大きな問題が起きることなく5月13日に開票まで日程通り行われ、その2日後の5月15日には結果を全会員へ通知し終えることができた。また選挙管理委員会も6月11日に選挙録の作成を終え、運営委員会へ提出を終えたため、その翌週の6月18日に解散することができた。

今回の選挙はJCARが発足してから初めて行われる運営委員選挙という事で、どのような事態が発生するのか未知数であった。選挙管理委員会の任務は、すべての手順を選挙実施要項と規約・細則を確認しながらの作業で、事務局の協力なくして遂行できなかった。事務局の皆様には多大な感謝を申し上げたい。

今回の選挙で、いくつかの問題も明らかになった。それらはすべて反省点と要望という形で選挙録に記載しているためここでは紹介しないが、これらは第3期運営委員会で議論されるだろう。また、選挙管理委員会でも様々な書式を作成することになった。これらの書式を次回の選挙でも雛形として使ってほしい。

最後に、今回の選挙の投票率が39.14%であった。昨今の国政選挙の投票率と比較すると、ちょうど20代と30代の投票率の間ぐらいの数字で、一般的には低いといわれている水準である。これを倍増するのはかなり難しいものと思うが、プラス10%ぐらいならなんとなくできそうな数字だと勝手に思っている。次は、JCARの知名度が向上し、今回の反省点を踏まえて、半数を超えることを期待している。

第3期JCAR運営委員（50音順）

氏名	所属	専門分野
青木 輝夫（委員長）	気象研究所	大気放射学
東 久美子	国立極地研究所	雪氷学
阿部 彩子	東京大学	気候モデリング
榎本 浩之	国立極地研究所	雪氷学、気候学、リモートセンシング工学
齊藤 誠一	北海道大学	衛星海洋学
柴田 明穂	神戸大学	国際法
杉本 敦子	北海道大学	生物地球科学
杉山 慎（副委員長）	北海道大学	氷河学・雪氷学
鈴木 力英	海洋研究開発機構	植生気候学
高倉 浩樹（副委員長）	東北大学	社会人類学・環境人類学・ロシア=シベリア研究
田中 博	筑波大学	気象学・気候学
中村 卓司	国立極地研究所	超高層大気物理学
羽角 博康（副委員長）	東京大学	海洋（物理）・モデリング
檜山 哲哉	名古屋大学	水文学、気候・気象学、地球環境学
深町 康	北海道大学	地球惑星科学 / 気象・海洋物理・陸水学（極域海洋学）
堀 雅裕	宇宙航空研究開発機構	極域リモートセンシング
矢吹 裕伯	海洋研究開発機構	データマネージメント
山口 一	東京大学	海氷予測、氷海工学
山内 恭	国立極地研究所	大気物理学・気候学

2015年7月24日現在

執筆者

国立極地研究所国際北極環境
研究センター

特任研究員

照井 健志 (てるい たけし)

researchmapを使おう~アンケートフォームと電子投票~

JCAR会員同士のコミュニケーションツールとしてresearchmapの運用開始より3か月経過しました。すでに一部の会員が参加して下さったことに感謝いたします。その一方でresearchmapの活用を推進できない事をお詫び申し上げます。Researchmap上のコンテンツを充実するべく、会員限定の写真やドキュメント等の掲載やメールでは送付できないサイズの大きいファイル等について順次アップロードしていきたいと思っております。現在、Web上の会員限定ページ(www.jcar.org/cms/)のコンテンツを着々と移植しており、全体集会の写真についても掲載しております。このニュースレター上でもresearchmapで何ができるのか、様々な機能を紹介していきたいと思っております。

今回、皆様に紹介したい機能は、「アンケートフォーム」です。researchmapのコミュニティでは、簡単に設計可能なアンケートフォームを設置できます。実際にアンケートを作成する際に表示される選択項目は以下のような画面です(図1)。この中で特に注目したいのは「期限を指定する」と「匿名で回答させる」です。期限日を指定することで、その期限日を超過した時点で自動的にアンケートは終了します。管理者も含めアンケートの実施中は締切日を変更できません。またresearchmapでは、参加会員の身元をe-RAD*1やGakuNin*2等のIDによって確認しております。匿名による回答についても高い信頼性を確保されております。質問項目の作成も簡単に作成可能です。質問項目の装飾や質問タイプの選択についても難しい設定や知識を必要としていません(図2)。

これらの機能を利用して、JCAR第3期運営委員会運営委員長の決定の際に電子投票フォームとして活用しました。本番の電子投票の実施の前に、第3期運営委員の皆様には事前にresearchmapへの参加案内を送付し、5日間のテスト投票を行いました(図3)。正常に機能することを確認後、本番の電子投票をわずか3日間で完了させることができました。締切日翌日には投票結果を開示でき、安全でかつ匿名性を確保して電子投票を終えることができました。

これほどの電子投票フォームを学会独自で作ろうとした場合、恐ろしい金額と時間が必要であることは間違いありません。このように簡単に実施できるresearchmapには、研究者を支援するサービスとして高い潜在力を感じられます。会員の皆様が所属している他の学会等でも、Webサービスの選択肢に入れていただければ幸いです。

最後に、今回の電子投票のために手順書を作成しました。JCARコミュニティ内で共有しておりますので、興味のある方はダウンロードしてください。

researchmapトップページ: <http://researchmap.jp/>

JCARコミュニティ: <http://researchmap.jp/community/JCAR/>

*1. 府省共通研究開発管理システム。科研費等の申請に必須のID。

*2. 学術認証フェデレーション。各大学等で認証基盤として利用されている。

研究集会等開催情報

北極に関連するシンポジウム、講演会、展示会などの情報は、以下のリンク先に掲載されています。Webに掲載してもよい研究集会等開催情報をお持ちの方は事務局までぜひ情報をお寄せください。

<http://www.jcar.org/menu03/>

編集後記

季刊JCARニュースレター第2号は、4月に富山で開催されたASSW2015の報告を中心に編集しました。欧米からは長距離の出張になるにも関わらず、これまでの実績を大きく上回る700人超の参加者に恵まれ、大盛況の会議になりました。運営に多大なご努力を払われた先生方や事務局の方々、富山市の方々に、深く感謝申し上げます。ASSW2015の成功は、基礎力の高い日本が、GRENE北極気候変動研究事業として一つの総合的な北極環境研究プログラムを遂行し、さらに、ArCSという次期研究事業に繋げようとしていることへの、国際的な期待の現れと考えます。これを励みに、日本の北極環境研究がより社会貢献の大きい成果を効率的に発信していけるよう、全研究者が協調的競争をしつつ、陰に陽に支援してくださる方々と密に協力して、推し進めていかねばなりません。

このJCARニュースレターは会員諸氏への情報提供を目的として刊行しておりますが、JCAR非会員の目にも触れ、北極環境研究の最前線を紹介する一助になればとも、思っております。会員諸氏には是非その様な使い方もしていただければと思います。JCARも第三期に入ります。このニュースレターが、JCARが日本の北極環境研究のより強固なコミュニティとして成長して行くための一助になれる様、今後とも、ご忌憚なきご意見、ご批判を頂ければ幸いです。

JCAR第二期 情報・コミュニケーションWG代表 山口 一（東京大学）

お問い合わせ先

本ニュースレターについては事務局までお問い合わせください。

北極環境研究コンソーシアム事務局
〒190-8518 東京都立川市 緑町
10-3

TEL:042-512-0927

E-mail: jcar-office@nipr.ac.jp

FAX: 042-528-3195

Web サイト:

<http://www.jcar.org/>

北極環境研究コンソーシアム
情報・コミュニケーションWG

代表

山口 一（東京大学）

委員

伊勢 武史（京都大学）

金野 祥久（工学院大学）

佐藤 篤司（防災科学技術研究所）

田中 泰義（毎日新聞社）

照井 健志（国立極地研究所）

深町 康（北海道大学）